『光の泉』1989-11
生長の家本部

〈プラス思考法〉

前向きライフのすすめ

絶好調の時を頭にインプット。

酒井 多賀志さん

さかい・たかし　昭和二十三年、東京生まれ。東京芸大オルガン科大学院修了。「70年万国博オルガンコンクール」最高位入賞後、演奏活動に入る。現在カトリック吉祥寺教会オルガニスト、東京純心女子短大、東京芸大講師。

各国で製造されたオルガンの音色を聞いていると、それぞれの「民族の祈り」を代弁しているように思えるという。パイプオルガンがヨーロッパ音楽としてあるだけでなく、いつの日か邦楽器としての存在を確保することを夢見て、酒井さんは着実に独自の音楽活動を続けている。その酒井さんの練習法が、一風変わっている。最高に調子がいいときにやめる、というのである。なぜだろうか。

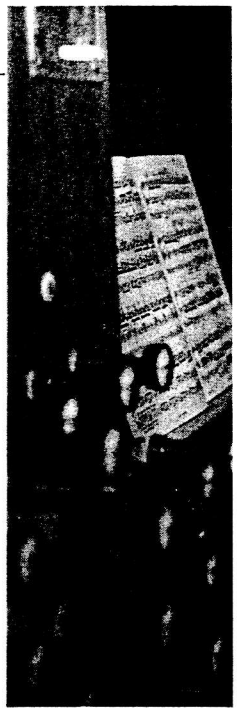
パイプオルガンを前に（武蔵野市民文化会館）　撮影／紀　善久

――酒井さんにオルガニストの道を選ばせたものは何だったのでしょうか。

「最初は声楽家になりたかったんです。残念ながら声があまり良くなかったので断念しましたが、オルガンの方は父がうたう歌の伴奏で小さい頃から弾いていました。父は声楽家志望だったのですが、周囲に反対されてその道に進めなかったのです。それで私が三歳の頃、『物がなくともまず音楽を』と家具もないのに、父は足踏み式のリードオルガンを買ってきました。伴奏したのは『出船』『叱られて』などの日本の曲ばかりでした。四歳から正式にオルガンを習ったのですが、パイプオルガンへ進む決意をさせてくれたものは、中学二年の時に聴いた、オルガニスト、ヘルムート・ヴァルヒャの弾くバッハの『トッカータとフーガ　二短調』（モノラル盤）でした。そのときの衝撃は忘れられません。その曲をさっそくリードオルガン用に編曲して、一年がかりでマスターしました」

――受けられた衝撃の大きさは、その後の練習法に影響を与えたと思うのですが。

「とにかくむきになって練習しました。芸大を受けることに決め、特にその試験一ヵ月前などは一日十時間の練習をしていました。合格してから練習量は少し減りましたが、在学中このやり方を通したため、三年生の時にスランプに陥ってしまいました。様々な目標をたてて練習するにもかかわらず、その目標がいっこうに達成されないのです。もう仕方がない、やるだけやってだめならオルガンをやめようと思い、やはり一ヵ月間ほど一日十時間の練習をしました。そんな時、ピアノ教師カール・ライマーが書いた本の中に『練習のやり過ぎは一番悪い』とあるのが目に止まったのです。練習して成果があがった時にパッとやめると、それが頭の中にインプットされる。しかし更にやって調子が落ちてからやめると、その状態がインプットされてしまう。だから自分で今一番調子がいいという時にやめる、そういう勇気が必要だというんですね。〝これだ〟と思いまして、以後一日三時間以上は弾かないことにしました。この方法で練習してみると、ぼくにとっては二、三十分の練習を三、四回するのが一番良いということがわ



かったんです。

どんな分野でもそうだと思いますが、最高に調子が出た時に止めるというのは、本当に勇気が必要ですね。でも、それをしてこそ自分の最高の状態がインプットされ、高い階段を上りながら上達していくことができると思うんです。調子を落としたときがインプットされてしまっては、いつも低い階段で留まっていることになり、めざましい上達は望めなくなってしまいます」

——練習方法はそれ以来一定しているのでしょうか。

「練習時間としてはそうですが、目白の東京カテドラルにあるような大オルガンと出合った時には新しい問題にぶつかりました。それまでは自分の指で弾いた音に注目して、音を耳でよく聴いてコントロールしていました。これは演奏の基礎として重要なことなんです。しかし、弾いてから実際に聞こえてくるまでにかなりの時間がかかる大オルガンでは、残響についても考えなければなりません。また、大きいだけに故障が出る場合もあり、聞こえてくる音に頼ることはできないのです。この問題の時にはフランスのマルセルデュプレが、バッハの全作品において克明に指使いをふった楽譜が出版されているのをみつけました。その楽譜には指使いを徹底的に合理的に考え、様々な課題を解決していく技術が示されていました。いついかなる時も自分はこの指使いでこのキイを押すという確信が、大オルガンの演奏では最も頼りになる事なのです。以来私も自分なりの指使いを徹底して考え続けています」

——書物を通して打開策をみつけられたわけですね。

「自分自身で解決するしかない問題にも、もちろん突き当たっています。パイプオルガンを勉強する普通のコースといえば、日本の音大を卒業したあとヨーロッパへ留学するのでしょうが、あえて私はこの留学に関しては拒否しました。その頃私はバッハの表現をめぐって悩んでいたのですが、『本場』などというものからでなく、私自身の中からその答えを見つけ出したかったのです。それに日本の民謡、演歌をパイプオルガンで演奏したいと考えていましたし、日本独自のものを作り出すことに非常に気持が傾いていたからです。子供の頃伴奏していた日本の曲から私のオルガンは出発しているのでしょう。

十年ほど前に、コンサートでバッハの曲を弾いている最中に、フッと自分はこの先何回バッハのここの部分を通過するのだろうかと考えてしまい、無性にいやになってしまったんです。ヨーロッパ音楽の描いている四季は復活祭とかクリスマスとか、人間がつくった四季で『情感』ではない。自然から影響を受けた四季がないように思うのです。

それに比べて日本の伝統芸術には必ず四季の情感があります。日本の詩情をオルガンで表現したいという思いがますます募り、自分で日本独自のオルガン曲を作り出すことにしたのです。八年前から始めて現在二十七曲になりました」

——パイプオルガンの日本情緒豊かな曲がある なんてすばらしいですね。

「それだけでなく、私の夢はパイプオルガンが邦楽器になることですよ。各国のオルガンの音色に特色があるように、日本的情感がその楽器で自然に表されるような、そんなオルガンが日本で作られるようになり、その上に自分の心が現代に表現できればいいと思うのです。そして最終的にはもともとオルガンの持つヨーロッパ的な要素と日本のオルガンが自然な形で結びつき、伝統とつながり、新しい作品、新しい時代を築いていければと願っています。音楽に限らず、国際性と土着性、伝統的なものと新しいもの、それらのアンサンブルによってこれからの社会が築かれていくのだと思います」